

平成28年度第2回郡上市総合教育会議 要録

日 時 平成28年7月28日(木)
開会 15時30分 閉会 17時30分

会 場 郡上市役所 4階大会議室

出席者 郡上市長 日置 敏明
教育長 石田 誠
教育長職務代理者 原 初次郎
委 員 杉本 尚之
委 員 清水 るみ子
委 員 水野 秋子

【オブザーバー】

副市長 青木 修
市長公室長 三島 哲也
教育次長 細川 竜弥
農林水産部長 下平 典良
商工観光部長 福手 均

【陪 席】

教育委員会学校教育課長 羽土 聡
教育委員会教育総務課長 一柳 芳之
教育委員会教育総務課長補佐 長尾 英行

【事務局】

市長公室次長兼企画課長 置田 優一
市長公室企画課主幹 石田 紀美江

議 事 (1) 郡上の高等学校の将来像について

市長あいさつ

本日は郡上の高等学校教育の将来像について話し合いを進めたい。調査等資料の説明を受けながら意見交換をさせていただきたいのでよろしく願います。

教育長あいさつ

白山開山1300年祭イベントで富山県立南砺平高校の素晴らしい郷土芸能を拝見した。全校生徒100人弱だがスキー部やバレーボール部も全国レベルで、県外からも入学している。地域にある特色とか自然や財産を活かすことによって魅力が増す。このことが希望

をもって入学したい学校づくりにつながるとなれば、そこに一つのヒントがある気がする。
本日はよろしく願います。

【報告事項等】

- ・学校の危機管理に関する連携について…………… 資料1に基づき、事務局報告
- ・平成28年度郡上市総合教育会議のテーマについて…… 資料2に基づき、事務局報告
- ・岐阜県立高校活性化計画（仮称）の策定における総合教育会議の役割について
…………… 資料3に基づき、事務局報告

【議 事】

○郡上の高等学校の将来像について

- (1) 学区別意見交換会の報告について …………… 資料4に基づき、学校教育課長説明
- (2) 郡上の高等学校の望ましいあり方を考える会での主な意見について
…………… 資料5に基づき、教育長説明
- (3) 関係者への聞き取り結果について …………… 資料6に基づき、事務局説明
- (4) 教育大綱の具現化による高校のあり方について …… 資料7に基づき、事務局説明

意見交換

委 員：資料7の方針②で「社会の環境の変化に左右されることなく」とあるが、社会環境の変化にも対応しなければいけないこともあるので、ここまで言及する必要はあるのか。
また「自信をもって」を例えば「自信や喜びをもって」など、子育てに対する肯定感というか喜びを盛り込んだ方が良い気がする。

事務局：対応します。

副市長：郡上北高校「学校活性化協議会」と郡上の高等学校教育の望ましいあり方を考える会では、両校をどういった形で存続させていけばよいか十分語っていただく必要がある。次にいずれ生徒数は減るので、郡上市や市教育委員会としても望ましいあり方について語られていないと、2つの立場から出ている意見に対する判断が難しくなる。3点目は総合教育会議の中で将来像実現のための方針や方策を形にしておくことが必要。2校を残すのが良いのか、郡上高校の八幡校舎、白鳥校舎があっても良いのか、そうしたところから話しをすれば、方向性を出すことについて覚悟が決まってくる。

委 員：郡上北高は分校としてではなく中高一貫教育を含め、今やっていることを幹として枝が出せる方法を考えてもらいたい。

委 員：郡上北高という名前を無くしてでも高校を残す方が子ども達にとっては良いのではないかと。寮生活ができる環境や通学助成についての施策として、行政が考えて取り組みを進めていったらどうか。

市 長：私たちはなぜ2つの高等学校を残してほしいのか整理すべき。子どもの数は決まっており、変えられる条件と変えられない条件があるが、できるだけ流出を抑え流入を図っていく。郡上の子ども数を考えた高校規模について、メリットとデメリットを整理して

いく。親の立場もそうだが、子ども達の将来にとってどうあるべきか考える必要がある。

副市長：15年先に270人となり、市外流出を考えると1校で済む人数となるが、市として、2校は地域に無くてはならない高校として、企業や地域社会、諸団体との結びつきを強め、存続すべき学校という状況をつくる必要がある。

市長：富山県立南砺平高等学校は分校であり、教育の実態やクラブ活動など研究する必要がある。子どもたちはどう考えるか。郡上市内の高校が1校となり通えない状況になると、加速度的に郡上市内の高校に通う子どもが少なくなる可能性がある。

副市長：15歳で郡上市を離れる子どもが増えるとその子たちの故郷はどこになるか。15歳から17歳の年代で人と出会い文化を身につける。郡上市を離れる子どもが増え、空洞化になることは避けなければいけない。昨年は何が何でも2校残すためにはどうするか論議をスタートさせた。このことは郡上市民全体の問題として触れ、熱意をもって協議した。

委員：地域の人が無関心になるのではなく、地域のことを思って子ども達を育てていける地域づくりが大切。

教育長：中学校を卒業した子どもを8割残すことを維持しようという考え方でいくと2校は必要。せっきく郡上の小中学校で育てた子ども達の8割は地元の高校に通わせたい。

委員：子どもが飛びつくような郷土芸能部とか作ったらどうか。郡上には郷土芸能は沢山あるし発表の場があると力が入る。

市長：できれば8割以上残したい。15歳から17歳の大切な3年間を市内で過ごすかどうかで地域への思いの度合いが違ってくるところは、さらに愛着を持って将来郡上へ戻って活躍し、郡上を担いたいと思ってもらえるよう今の教育の関わり度合いを強めていかなければいけない。

副市長：最近の中高生は比較的仲間との関係を大切に。部活動、学級・学校行事など仲間と一緒にやって達成感や関係を築き、そうした仲間のいるところが自分たちの故郷という感覚が強い。もう一つは15歳から17歳の間にいかに良い大人に出会えるか。もう一つは地域の活動や郡上市全体の行事、事業がメディアに載って、自分たちの住んでいる所は意外といいという感覚を持つ生徒もいる。仲間づくり、大人との関わり、社会（地域の価値）を体験しているかが大きい。学校教育では仲間を意識した活動をより積極的に行なう。また大人と関わる活動によって生徒自身が世の中へ出て郡上の値打ちを知ることのできるさと意識を育む。小中学校では基本的に知識のレベルで終わることが多く、それを生き方というレベルですり込むには高校生での体験が大きい。県の教育委員会が地域社会人という言葉を使っているのはそういう意図がある。大人の思いが強いが強くないかで変わってくる。できるかより、やるのが大切。

市長：特色ある学科は高校教育だけの問題ではなく、産業界との関わりがある。昨年からの議論の中で思いは一つにしながら、どのようにして郡上の2つの高校で望みうる最高の高校教育をしていくかが出発点の目標で、そのためにいかに行動すべきかの議論を深めていくということによろしいか。

今回は2つの高校を、教育の観点から、そして郡上の地域の将来を考える上からどのよ

うな方策が良いかについて話し合う。

室 長：次回は9月29日（木）を予定している。高校2校を残すという方向で共通認識されたことと、資料7で出した基本的な考え方が重要であることを再確認した。次回は具体的な策に入っていくが、各部長から市としての今後の施策、取り組みにおいて参考意見を出していただく。

原教育長職務代理者あいさつ

次回からまとめに入っていくが郡上高校、郡上北高校が存続できるようにしていきたい。
お疲れ様でした。